

| | |
|--------------|---|
| Title | 古墳時代政治構造の研究 |
| Author(s) | 広瀬, 和雄 |
| Citation | 大阪大学, 2004, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/46037 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

| | |
|------------|---|
| 氏名 | ひろ 瀬 かず 和 お 雄 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 (文 学) |
| 学位記番号 | 第 18933 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 16 年 6 月 17 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 2 項該当 |
| 学位論文名 | 古墳時代政治構造の研究 |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 都出比呂志 (副査) 教授 梅村 喬 助教授 福永 伸哉 助教授 高橋 照彦 |

論 文 内 容 の 要 旨

3 世紀半ばに始まる古墳時代は、大和政権成立期ともとらえられるように倭人社会に初めて大きな政治的まとまりが生まれた時代である。本論文は、畿内地域を中心に九州から関東にいたる広範囲の古墳築造動向を詳細に検討するという方法でこの時代の政治構造の実態と特質を解明し、さらに独自の国家形成論の観点からその歴史的評価に論及した意欲作である。全体は序章、終章を含めた 11 章から構成されており、本文 A4 判 280 頁 (400 字詰原稿用紙換算約 800 枚)、図表 70 頁の分量である。

研究の課題や方法を示した序章に続き、第 1 章～第 4 章では畿内地域に造営された五つの巨大古墳群 (大和・柳本古墳群、佐紀古墳群、馬見古墳群、古市古墳群、百舌鳥古墳群) の群構造や築造の推移を詳細に分析する。おおむね 3 世紀半ばから 5 世紀後半ごろにかけて造営された五大古墳群は、大王墓やそれに匹敵する巨大前方後円墳を累代的に築造し続けたという点で傑出した存在であり、それらが政権の政治拠点である奈良盆地にいたる交通の要衝に位置する事実の背後に「巨大古墳の環大和政権配置」とも呼ぶべき政権の明瞭な政治意志を見いだす。そして、大和政権はこれら大規模古墳群を築いた有力首長系譜が輪番的に大王を出しながら共同統治する構造を持っていたと結論づける。

第 6 章では東西日本の 10 地域の事例をとり上げて首長墳の推移を整理しながら、大和政権による地方統治のあり方を検討する。古墳時代前期 (3～4 世紀) においては各地で前方後円墳が築造されるものの構造的には多様性や地域性が顕著に認められるが、中期 (5 世紀) には埴輪・葺石・段築成などの諸要素に畿内的な画一性が強まるとともに形と大きさによる階層的秩序が明瞭になってくる。この変化の背景として、大和政権が主宰した古墳祭祀に地方首長が自らの意志で参画しようとした段階から、古墳造営という行為が政権による地方首長再編成の道具と化す段階へという、地方統治の強化を想定した。

第 7 章以降では 6～7 世紀の群集墳を中心に後期古墳の分布や埋葬施設構造の分析を進める。周辺に空地があるにもかかわらず小古墳が局所的に群をなす状況から、政権が墓域の賜与という手段を用いて首長膝下の共同体内で台頭してきた家父長層との間に直接の政治関係を設定していく動きを読みとり、これを新たな地方支配方式の創出と評価した。

以上の分析をもとに、終章においては大和政権が自らの政治基盤と地方支配を強化していく過程を時系列的に整理し、古墳はその政治秩序を内外の人々に対して視覚的に訴える装置であったと意義づける。さらに、政治秩序が墳墓祭祀に媒介された点を重視して、大和政権に連なることが各地域の共同体の繁栄にもつながるといある種の「共同

幻想」によって全体が維持されたととらえ、大和政権によって運営されたこの政治的枠組みは、「領域と軍事権と外交権を持ち、イデオロギー的一体性にささえられた首長層の利益共同体としての前方後円墳国家」と総括した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、文字資料がきわめて乏しい古墳時代の政治構造や地方支配の展開をいかに解明するかという困難な課題に対して、考古学的方法を駆使して果敢に挑戦したものである。

まずなによりも、大型前方後円墳が陵墓に指定され、研究上の多くの制約があるなかで、畿内地域の大規模古墳群の構造分析に真正面から取り組んだ点が高く評価できる。とりわけ、的確な編年的検討をふまえてほぼ1世代程度の小時期ごとに最大規模の前方後円墳を抽出し、この大王墓を中心とする古墳の階層関係を整理しながら、古墳時代前期、中期、後期の政権構造の特徴と推移をとらえた分析手法は、今後の古墳研究に大きな影響を及ぼすと考えられる。また、大和政権の実態がこれら大規模古墳群を残した有力首長系譜による共同統治であったとの指摘は、検討に値する魅力的な仮説である。

こうした政権中枢の構造分析に加えて、政権と地方との関係についても首長墳や群集墳の豊富な事例分析によって十分に考察が深められている。古墳時代の政治関係を大和政権と地方首長の間に設定された1次的関係と地方の首長や有力層の間で完結する2次的関係に分けてとらえ、前者が後者を浸食していく過程を鮮やかに描き出した叙述は見事である。

さらに、このような政治構造を持つ古墳時代社会をとらえる枠組みとして「前方後円墳国家」という独自の概念を提唱した意欲的な試みは、細分化した個別研究に沈潜しがちな現在の日本考古学界に対する大きな問題提起ともなるものである。

ただ、明確な主張を持った力強い叙述ゆえにときに論理展開や用語の概念規定に丁寧さを欠く部分があった点は惜しまれる。また、独創的な「前方後円墳国家」の提唱についても、先行する国家形成論研究との関係をより明確にするなどの配慮があれば、今後予想される論争がより実り多いものとなるであろう。

とはいえ、膨大な古墳資料を独創性豊かな手法によって分析し、明確な古墳時代像を提示することに成功した本論文は、今後の古墳研究においてつねに参照されるべき学史的な価値を有しているといっても過言ではない。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。